

# 詩歌を体現するポーリーン

## ——ブラウニング作『ポーリーン』の研究——

吉 門 牧 雄

### 第1章 ブラウニングの疾風怒涛時代

『ポーリーン:告白の断片』(*Pauline: A Fragment of a Confession*)は、1833年3月、ロバート・ブラウニング(Robert Browning)が二十歳の時に初めて出版した作品であるが、結果的に一冊も売れなかった。<sup>1</sup> また、匿名で出版されたため、家族や友人など少数の者以外は、この詩がブラウニングのものとは知らず、また彼自身もこの作品を書いたことを長い間伏せていたが、1847年にダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ(Dante Gabriel Rossetti)が大英博物館でこの詩を読み、これはブラウニングの作品に違いないと推測し、ブラウニングに確認を求めてきた。また、1867年には、R.H. シェパード(Shepherd)からこの詩の抜粋を出版する許しを求める手紙が、ブラウニングのもとに届いた。こうした事情から、いずれ海賊版が出る恐れもあり、1868年に出版される作品集に『ポーリーン』を再録する決心をしたのである。この詩はタイトルが示すように断片を集積したものであり、必ずしも厳密な論理的発展がある訳ではなく、ポーリーンへの語りかけの中に、長い自己分析の部分があり、時には「太陽を踏む者」(“Sun-treader,” l. 151)たるパーシー・ビッシュ・シェリー(Percy Bysshe Shelley)に、時には神に、またキリストに語りかける形になっている。なお、この詩にはブラウニング自身の自伝的要素が多く含まれているが、決してノンフィクション的なものではなく、幾つかのフィクションを織り交ぜた形の「告白」になっている。それ故に、この詩を論じる際には、語り手である話者と、作者であるブラウニングを区別する必要がある。実際、この詩ではポーリーンはフランス語が書ける女性で、「自然はまったく野生のまま、湖、雪で包まれた山々」(“nature lies all wild amid her lakes / And snow-swathed mountains,” ll. 952-953)が美しいスイスのような所に住んでおり、話者はそこでポーリーンに出会ったという設定になっている。そして、母国への強い愛着を抱いた話者は、外国に居て外国語の文章の中に、イングランドの言葉を見つけて喜びを感じている。この時点では、ブラウニングは外国に一度も行ったことはなく、この部分はまぎれもなく伝記的事実とは異なりフィクションである。

この作品では何事かを成し遂げたいという野心はあるが、あり余る熱情や才能をどこに向けていいか分からない話者が、それまでの信仰も失いかけていた状態から少し抜けかけたが、まだ完全にはそれを克服できていない「中間の段階」が描かれている。これは、ブラウニングが精神的に荒れて、いらいらした状態になり、宗教的にはヴォルテールの理神論、さらには、シェリーの『クイーン・マブ』(*Queen Mab*)の無神論の影響で、自らを無神論者と呼ぶに至ったことを思い起こさせる。<sup>2</sup>

I strip my mind bare—whose first elements  
 I shall unveil—not as they struggled forth  
 In infancy, nor as they now exist,  
 That I am grown above them, and can rule them,  
 But in that middle stage, when they were full,  
 Yet ere I had disposed them to my will;  
 And then I shall show how these elements  
 Produced my present state, and what it is.

(ll. 260-267)

自分の心をまる裸にして、  
 心の最初の本源の覆いを剥がそう。  
 幼いとき、心の主体要素が苦勞して進んだような姿ではなく、  
 それらを追い越して、支配できるようになった今、  
 今ある姿ではなく、  
 それらで一杯であったが、それらを私の意志に従わせる前の、  
 あの中間の段階で現そう。

この詩の最終段階では、話者はある一定の安定状態に入り、過去の「荒れた思い」(“wild thought,” l. 10) の時代を過去のものと思える状態だが、まだその残像が残っており、下手をするとそこに再び引き戻されかねない現状である。

Thou lovest me—the past is in its grave,  
 Tho’ its ghost haunts us—till this much is ours,  
 To cast away restraint, lest a worse thing  
 Wait for us in the darkness. . . . .

(ll. 39-42)

あなたは私を愛する。  
 過去の亡霊は私たちのところにしばしば現われても、  
 過去そのものは墓の中にある。  
 より悪いものが暗がりの中で、私たちを待ち受けないように、  
 束縛を投げ捨てること、  
 これらは、なおも私たちの大きな仕事である。

ここで「束縛」とあるのは、あたかも「闇の中の悪鬼」(“a fiend, in darkness,” l. 99) のような心が荒れていた過去の束縛であり、今やそれを脱ぎ捨てないと前には進めない段階を迎えている。同様な思いは、この詩のモットーとして引用した「私はもはやかつての自分ではないし、かつての自分にはなれないだろう」というクレマン・マロ (Clément Marot) の言葉にも表れている。ポーリーンとの語りの中で、時には微笑み、時には不注意な言葉を発していた話者だが、心の奥底には常に「深い恥じの思い」(“a deep shame,” l. 62) を隠していた。その頃の彼は長らく「狡猾さ、妬み、虚偽」(“cunning, envy, falsehood,” l. 351) などに汚されていて、憎しみを強く感じることも

あった。また、宗教的に言えば「罪、欲、驕りに、まるで魔法をかけられたように繋がれていた」(“I am knit round / As with a charm, by sin and lust and pride,” ll. 846-847)。そんな自分の荒れた過去に戻りたくないという思いを抱いていたのである。

その昔の状態について、話者はポーリーンに「その時、あなたは私の目的もなく、希望もない状態を見る」(“Thou seest then my aimless, hopeless state,” l. 50)と赤裸々に語っている。この言葉は、ブラウニングの辞世の詩と目されている「エピローグ」(‘Epilogue,’1889年)を思い起こさせる。この詩の中で、ブラウニングは自分の人生を次のように振り返っている。

Oh to love so, be so loved, yet so mistaken!  
 What had I on earth to do  
 With the slothful, with the mawkish, the unmanly?  
 Like the aimless, helpless, hopeless, did I drivell  
 —Being—who?

(ll. 6-10)

おお、かくも愛し、かくも愛されたのに、かくも間違うのか。  
 怠惰で、吐き気を催させる、めめしい者たちと、  
 私はいったい何の関係があったか。  
 目的もなく、無力で、希望もない者たちのように、  
 私は戯言を言ったであろうか。  
 私は誰だったのか。

このように、戯言など言ったことがないと断言したブラウニングではあるが、青春時代、彼にも「目的もなく、希望もない状態」があったことが『ポーリーン』を読むと分かる。それ故、『ポーリーン』は将来の明白な目的と希望を見いだせないブラウニングの心の葛藤を感じさせる貴重な作品であると言えよう。話者の葛藤の原因としては、若者特有の既成の価値観に対する反抗心や先述のシェリーの無神論の影響なども考えられるが、やはり、音楽や絵画などにも通じ、多彩な才能とエネルギーにあふれたブラウニングが、その有り余るエネルギーをどこに向けていいか分からなかったことが主な原因だろう。何か一つの喜びに集中したいとの気持ちがにじみ出ている詩句もある。

My selfishness is satiated not,  
 It wears me like a flame; my hunger for  
 All pleasure, howsoe'er minute, is pain;  
 I envy—how I envy him whose mind  
 Turns with its energies to some one end!  
 To elevate a sect, or a pursuit,  
 However mean—so my still baffled hopes  
 Seek out abstractions; I would have but one  
 Delight on earth, so it were wholly mine;  
 One rapture all my soul could fill . . .

(ll. 601-610)

私の自己本位は満たされていない。  
 それは炎のように私をすり減らす。  
 全ての快樂への飢え渴きは、いかに小さくあろうとも痛みである。  
 私は、いかに卑しくとも、自分の願いと、その追及を高めるために、  
 エネルギーの全てをある一つの目的に注ぐ人を、いかに羨むことか。  
 今なお挫折している希望はその現れを探し求める。  
 地上で、ただ一つの楽しみがほしい。  
 そうすれば、それは全く私のものとなるだろう。  
 一つの歡喜が私の魂の全てを満たしてくれるだろう。

ここには自らの心が満たされない葛藤や、身をすり減らすような焦燥感が垣間見えるが、それは決して怠惰を意味するものではなく、余りにも多くのものを願い、自分が中心にあって全ての喜びを経験することを願っての挫折であった。そんな中でも、彼は青年期の時を一秒たりとも無駄にしなかったと自負している。

· · · so if age came,  
 I should be as a wreck linked to a soul  
 Yet fluttering, or mind-broken, and aware  
 Of my decay. So a long summer morn  
 Found me; and e'er noon came, I had resolved  
 No age should come on me, ere youth's hopes went,  
 For I would wear myself out—like that morn  
 Which wasted not a sunbeam—every joy  
 I would make mine, and die; · · ·  
 (ll. 496-504)

それで、老年がやってきたら、  
 今なお、はためいているが悲嘆にくれて、  
 自分の崩壊を知っている魂と結びつく難破した人間のよう、  
 私はなるだろう。  
 それで、長い夏の朝が私を見出した。  
 昼が来て、青年期の希望が去っていくまでは、  
 老齡は私にはやって来ないと決心していた。  
 というのも、太陽の光一筋も無駄にしなかった、  
 あの朝のように、私は自分を使い尽くしたい。  
 私はあらゆる喜びを自分のものにして、死にたい。

ついには老年期が来ることを話者は意識しているが、人生の昼たる壮年期がくるまでは、青年期の希望は続くはずである。それ故、一瞬たりとも無駄にしたいと思いが溢れている。飽くなき成長を求めてやまない彼は自らを見つめて自己分析し、こう告白する。

I am made up of an intensest life,  
 Of a most clear idea of consciousness  
 Of self—distinct from all its qualities,  
 From all affections, passions, feelings, powers;  
 And thus far it exists, if tracked in all,  
 But linked in me, to self-supremacy,  
 Existing as a centre to all things,  
 Most potent to create, and rule, and call  
 Upon all things to minister to it;  
 And to a principle of restlessness  
 Which would be all, have, see, know, taste, feel, all—  
 This is myself; and I should thus have been,  
 Though gifted lower than the meanest soul.

(ll. 268-280)

私は最も強烈な生命からなっている。  
 自己のすべての性質とは区別される、  
 自己に対する意識の最もはっきりとした考えから成っている。  
 全ての愛情、熱情、感情、力からも区別されて。  
 そして、もし跡を辿れば、それは全ての人の中に、  
 ここまで存在しているが、私においては自己至上と結びつき、  
 全てのものへの中心として存在する。  
 それは全てのものを創り、支配し、  
 全てのものに自分に仕えるように要求するのに、最も力強い。  
 全てとなり、全てを持ち、見て、知り、味わい、  
 感じる休むことを知らぬ心の原理と結びつく。  
 これは私自身である。  
 最も卑しい魂よりも低い賜物しか与えられていないが、  
 私はこのようであるべきだったろう。

ここには余りにも激しい強烈な自意識と自己中心性が吐露されている。強烈な自我は、全てのものを知り、全てのものの中心となりたがっている。そのため、飽くなき探求を続ける話者には安らぎや満足感はない。

このような話者の自己意識について、ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill) によって非常に重要な指摘がなされているので、ここでミルの見解を考察してみたい。先述のように、この作品は匿名で出版されたが、ブラウニングは W.J. フォックス (Fox) に書評を書いてくれそうな人に配ってほしいと依頼して、十二冊を送った。フォックスはそのうちの一冊をミルに送る。ミルはこの作品の書評しようと試みたが、エグザミナー誌、タイムズ誌に書評を阻止されてしまう。結局、ミルは彼の本をフォックスに返すことになったが、次のような言葉が添えられてあった。

私は出来るだけのことを施して、『ポーリーン』を送ります。余白にはぎっしりと注釈を書き、

遊び紙にはまとめを書きました。全体として、私の所見は筆者に阿ってはいません。恐らく、筆者に見せるには表現が強すぎるでしょう。<sup>3</sup>

ミルのコメントは書評の基礎としてではなく、書評の代わりに書かれたものであった。ミルはしばしば『ポーリーン』の詩句について、しばしば意味不明瞭であると指摘し、また、時には優れた詩行に称賛の声もあげているが、最後に、作品全体に対して「要約」として、次のような見解を披歴している。これは極めて重要な内容であるので、全文を引用したい。

この著者は相当な詩的能力を持っているが、今まで私が正常な人間の中で知っていたよりも、もっと強烈で病的な自意識に取りつかれているように、私には思える。たとえ好ましくない状態についてのものであろうとも、それは真実な告白であると考えてはいるが。それも、『ポーリーン』という女性が単なる幻のような存在でないとすればの話だが。彼女については全てのことが矛盾に満ちている。彼は彼女を愛していないし、愛しているとも思っていない。それなのに、彼女に愛を語っていると信じている。もし彼女が存在していて、彼を愛しているとすれば、彼は彼女のことをひどく狭い心で、冷酷に扱っているようだ。彼の志、憧れ、後悔は全て他のことに向かっている。決して彼女に向かっているのではない。その後、終わりの方で空世辞を一つ言って彼女を解雇しているが、それは帰するところ、次のような穏当な要求に達した。すなわち、彼女が彼を愛してともに生きてくれること、また、彼は彼女を愛していないが、彼女がその身を委ねてくれること、そうすれば彼女のことを考え、彼女を素晴らしい人と呼び、彼女はそれをとて嬉しと思うだろうことを彼女に約束する、というものだ。それから、彼は明日までには自分の心が変わっているし、とても美しいと思われ、一度叶えられたら、疑いもなくもう一度望むような意図を軽蔑し、その結果、アイルランド人なら「彼に禍あれ」と言うだろうが、完全な喜びに入るであろうと言って話を終えている。

最も美しい語句の寄せ集めが、この詩から作られるかも知れない。そして、彼自身の心理的伝記は力強く、真実らしい。確かに、最後の段階を除いては、全てにおいて真実らしく見える。真実に到達していないのは明らかであるが。自分を探し、自分を崇める状態がうまく描かれている。私が思うに、それを超えて自分自身の状態を軽べつする次の段階に入っている。そのような自己卑下の一部分でさえ当然とみなされないことがあるのかどうか疑問に思う。彼は明らかに不満を持っている。彼の状態の悪さの一部を感じている。しかし、それが彼の中から追い出されたようには書いていない。もし彼が自分の自己本位に対する心からの憎しみを振り起こすことができたなら、それは消え去るだろう。実際、彼は積極的な悪ではなく、善の欠如のみを感じている。自責の念ではなく、ただ落胆のみを感じている。このような状態の精神は何か新しい情熱によってのみ再生できる。彼のために何を望んで良いか分からないが、ただ彼が本当のポーリーンに出会うことを望むのみだ。それまでは、一人の人がどのように、この病的な状態から回復できるかを示すようなことを企てるべきではない。それというのも、彼はほとんど回復の見込みがない。そして、私たちが知っていること以外の何を語るべきだろうか。<sup>4</sup>

ここで、ミルは作者の詩的能力を認めながらも、彼の「病的」な自意識と自己中心性のためにポーリーンを本当には愛していないと語る。ミルの評価はかなり厳しいが、的を射ていると思う。愛とは相手のために自分を捧げても良いと思うような自己犠牲の感情を引き起こすものだが、話者

の場合はそれを相手に求めている。実際、ポーリーンを積極的に深く愛することは出来ず、一方的に愛して欲しいという思いが強い。

Love me—love me, Pauline, love nought but me;  
 Leave me not. All these words are wild and weak,  
 Believe them not, Pauline. I stooped so low  
 But to behold thee purer by my side,  
 To show thou art my breath—my life—a last  
 Resource—an extreme want: . . . .

(ll. 903-908)

私を愛してくれ。この私を愛してくれ。  
 ポーリーンよ、私以外は誰も愛さないでくれ。  
 私から離れないでくれ。  
 これらの言葉全ては野生的で弱いのだ。  
 言葉を信じるな、ポーリーンよ、  
 私は低く屈むのも、ただ私の側らのあなたをより清らかに見て、  
 あなたが私の息、生命、最後の救いの希望、  
 究極的に必要な人であると示すためである。

これは本当の意味での愛ではなく、自己愛とでも言うべきものであった。そのような状態を救えるのは話者が本当のポーリーンに出会うことだと、ミルは語る。ミルによれば、ポーリーンは幻のような存在で、本当の者でないことになる。それでは、この作品の中でポーリーンはどのような役割を演じているかを、次に考察しよう。

## 第2章 ポーリーンの役割

### 第1節 文書としての『ポーリーン』

ミルは、話者が本物のポーリーンに会えるように願っているが、それは、この作品の中でポーリーンの存在感が薄く、話者とポーリーンの間に現実的なやりとりがないからであろう。しかし、心が荒れていらついている状態の話者を救ったのは、やはり他ならぬポーリーンであった。

では、この作品の中でポーリーンという女性は、具体的にどのような役割を担っているのでしょうか。このことを理解するうえで、最初に『ポーリーン』という作品が文書として書かれたものであることを理解する必要がある。この詩の末尾に、「リッチモンド / 1832年8月22日」と付記されていることに関して、ミルは「ポーリーンに話しかけている形から、大衆に手紙を書いているという形への移行（場所と日付を入れての移行）は全くひどいものだ」とコメントしているが、このことはミル自身もこの作品が文書に書かれた設定になっていることを理解していなかったことを示している。<sup>5</sup>ちなみに、1832年8月22日は、ブラウニングがリッチモンドにエドモンド・キーン(Edmund Kean)が演じる『リチャード三世』(*King Richard III*)を観に行き、『ポーリーン』作成を着想した記念すべき日であった。

確かに、この詩は冒頭を含め幾つかの部分では、直接ポーリーンに語りかけるスタイルになっている。冒頭の部分を引用してみよう。

PAULINE, mine own, bend o'er me—thy soft breast  
 Shall pant to mine—bend o'er me—thy sweet eyes,  
 And loosened hair, and breathing lips, arms  
 Drawing me to thee—these build up a screen  
 To shut me in with thee, and from all fear,

(ll. 1-5)

ポーリーン、私だけの者よ、私の上に御身を屈めておくれ。  
 あなたの柔らかき胸は、私の胸に合わせて喘ぐだろう。  
 御身を屈めておくれ。  
 愛らしい瞳、解かれた髪、息づく唇、  
 その御腕は、私をあなたの許に引き寄せる。  
 これは、私をあなたと一緒に閉じ込める衝立となり、  
 全ての恐れからも匿ってくれる。

この部分だけを読むと、ブラウニングが得意とした劇的独白のようにも思えるが、ポーリーンからのリアクションはない。作品全体を読むと、これはポーリーンに直接語りかけた告白ではなく、文書に書かれたものという設定になっていることが分かる。それは次のような詩句から推測できる。

· · · but when dark hours come;  
 And I feel sad; and thou, sweet, deem'st it strange;  
 A sorrow moves me, thou canst not remove.  
 Look on this lay I dedicate to thee,  
 Which thro' thee I began · · ·

(ll. 867-871)

しかし、暗い時間がやって来て、  
 悲しい思いになり、愛しいあなたでも  
 取り除くことが出来ない悲しみが、  
 私の心を動かすのを見て、奇妙だと思ふ時は、  
 あなたに捧げる、この詩を見てくれ。  
 この詩は、あなたを通して始めたのだ。

「この詩を見てくれ」というのは、この詩の言葉が書かれた文書を見て、読んでくれという意味である。ポーリーンでさえ取り除けない悲しみが自分を襲うこともあろうが、その場合には、この文書、すなわち、この詩を読んでもらえば分かってもらえると告白する。さらに、この詩が文書であることの決定的な証拠として挙げられるのは、ポーリーン自身がフランス語で書いた注釈で、811行の注として挿入されている。話者は自分の周りに生け垣を張り巡らして、そこに思想を閉じ込めれば集中できるが、生け垣の向こうを、つまり、広い世界を見ると悲しくなる。そこには色々

な喜びがあるが、不死ではない話者はそれら全てを味わうことは出来ないからである。そこで、話者は「ああ、神よ、これらの世に認められようと奮闘する目的は、どこに向かうのでしょうか！」（“O God! where does this tend—these straggling aims!”）という言葉を発する。この言葉に対するポーリーンの注釈であるが、これは重要なので全文を引用しよう。

私の気の毒な友人が、この奇妙な断片のうち、まだ読まれていない部分において、必ずしも完全には理解されないのではないかと、また、まさにその性質上、常に混乱した夢として残っているものを解明することに、彼はどの人よりも適していないのではないかと私はひどく心配しています。その上、幾つかの部分の調和させようとする企てにおいて、かくも珍しい作品が主張できる唯一の長所をそこない、単に概略を述べたにすぎない型の、かなり正確な概念を与える危険を冒すことにならないかに関しては、全く確信が持てないのです。この虚飾のない冒頭、最初は高まるが、徐々に鎮まってくる熱情、すなわち魂の衝動、この突然の自己への回帰、とりわけ私の友の全く例外的な心の傾向は変更をほとんど不可能にしています。彼が他の所で提唱している理由、そして、さらにもっと力強い理由が、私に好意的にこの作品を見させています。そうでなければ、彼にそれを火の中に投げ入れることを助言したでしょう。このことは、私が全ての作品の偉大な原理を信じていないことを意味するものではありません。つまり、私はシェークスピア、ラファエロ、ベートーベンの原理を信じていない訳ではないのです。その原理から言えることは、概念の集中というものが、制作よりもはるかに、着想によるものであることです。これらの性質のうち第一のものである着想が、未だに私の友人には分からないものであることを恐れる十分な理由が、私にはあります。彼の努力を二倍にすることが彼に第二のものたる制作を獲得させられるかどうか、はなはだ疑わしいです。最善のことは、これを燃やしてしまうことかもしれませんが、どうしようもありません。

この後に続く部分で、彼は以前に実行した、人の魂の、いやむしろ、彼自身の魂の吟味に言及すると信じています。吟味は、成し遂げることが可能であり、ひとたび達成されれば、そこからまた他の目的や、他の企画や、他の楽しみ（今度は、それらが乗り越えられるべきですが）が認められるような高台を、それぞれが形作っているような一連の目標を発見するためのものです。結論的に言えば、忘却と眠りが全てのものを終わりにするということです。私は、この考えを完全には理解している訳ではないのですが、恐らく彼にも理解できないでしょう。<sup>6</sup>

ここでポーリーンは、詩人である話者を「友人」と呼んで、この詩の内容について論じている。ポーリーンによれば、この特異な作品を多くの読者が理解しやすいように、変更を加えることは事実上、不可能であるし、それが良い事とも思われぬ。話者は着想の大事さが分かっておらず、話者に詩の構想を与えた詩的想像力が十分強くないので「思想の集中」を得させるに至っていない。これを焼却するのが最善であるとまで考えているのだが、ラテン語の題辞にもあるように、彼はまだ若者にすぎないのだから、鼻屑目に見てこれを残そう。普通の恋愛詩では、恋人がこのようなことを語ることは恐らくありえないと思うが、ここでポーリーンはブラウニング自身の代弁者としても機能していると言えよう。ポーリーンの注釈をここに挿入することによって、著者はこの詩の未熟さも十分に分かったうえで、敢えてそのままにするのだということを読者に伝えたかったのだろう。このように、ポーリーン書かれた文書であるという事は、この詩の解釈に大きな影響を与える。つまり、ポーリーンは一般の恋愛詩が想定する恋愛の対象という観点では理解できない作品であると言えよう。

## 第2節 詩歌を体現するポーリーン

これまでの分析からも、『ポーリーン』が一般的な恋愛詩とは、明らかに違っていることが分かる。それは次の引用からも分かる。

· · · thou art not more dear  
Than song was once to me; and I ne'er sung  
But as one entering bright halls, where all  
Will rise and shout for him. Sure I must own  
That I am fallen—having chosen gifts  
Distinct from theirs—that I am sad—and fain  
Would give up all to be but where I was;

(ll. 76-82)

あなたは、詩歌が私にとってかつてそうであったほどには、私に親しくない。  
私は詩歌<sup>うた</sup>う時はいつも、皆が起き上がって、  
彼に向かって叫び声をあげる明るい広間に入ってきた人のようであった。  
確かに、私は倒れている。  
皆のものとは違う賜物を選んで倒れ、悲しみのあまり、  
ただ昔、自分がいたところに戻るために、  
全てを諦めてしまいたくなったことは認めねばなるまい。

話者がまだ少年の頃、未熟な詩を作っている時には詩はあなたよりも親しいものであった、と明言する。普通、恋人とおぼしき人にこのようなことは言わないだろうが、この話者は臆面もなくそう語る。そして、多くの人に称賛された。しかし、本格的に詩人になろうとすると壁にぶつかり、行き詰っている。それを話者は「倒れている」と表現しているが、他の多くの人とは違う道、詩人という道を歩むと決意するまでには、数々の葛藤があった。

Not high as I had been, if faithful found—  
But low and weak, yet full of hope, and sure  
Of goodness as of life—that I would lose  
All this gay mastery of mind, to sit  
Once more with them, trusting in truth and love,  
And with an aim—not being what I am.

(ll. 83-88)

忠実であると認められれば、  
私がかつてのように高くはなく、低くて弱かったが、  
生命と善を確信し、希望に満ちていた。  
今の姿とは違って、真実と愛に信頼して、  
もう一度、皆と一緒に座り、ある目的を持つようになるためには、  
この喜ばしい心の熟達を失ってしまうだろうことを認めざるを得ない。

そして、昔は良かったという思いが湧いてくる。皆と同じところに戻るためには、「心の熟達」を捨ててしまわねばならない。「心の熟達」とは、この場合、詩の技法を意味するが、<sup>7</sup> 詩人として独り立ちするという大それた思いを捨てれば楽になると考えたこともあった。そのように、詩的想像力が休止した時に話者は新たな試みを始めた。偉大な先輩詩人たちの作品を学び始めたのである。

· · · and then I paused—  
 I had done nothing, so I sought to know  
 What mind had yet achieved. No fear was mine  
 As I gazed on the works of mighty bards,  
 In the first joy at finding my own thoughts  
 Recorded, and my powers exemplified,  
 And feeling their aspirings were my own.  
 And then I first explored passion and mind;  
 And I began afresh; I rather sought  
 To rival what I wondered at, than form  
 Creations of my own; so much was light  
 Lent back by others, yet much was my own.

(ll. 382-393)

それから、私は休止した。私は何もしなかった。  
 それで、他の人の心がこれまでに成し遂げたことを知ろうとした。  
 力強い詩人たちの作品を眺めたとき、いかなる恐れもなかった。  
 自分自身の思想が記録され、自分自身の空想が正当化され、  
 彼らの憧れが真に自分自身のものであると発見した初めの喜びの中で。  
 それらと共に、私は初めて熱情と精神を探究した。  
 全ては新しく始めるものであった。  
 私は自分自身の創造物を作るよりは、  
 自分が驚嘆したものと張り合うことをむしろ求めた。  
 それで、他の人たちに供し与えられた光が多ければ、  
 私の光も多くなるのだった。

このように、先輩の詩人たちへの傾倒は非常に大きいものであった。ブラウニングも少年の頃、書棚にあった *Bagster's English Poets* の六十二巻 (1807年版) をよく読んでいる。自分の中に湧いてくる「空想」、すなわち詩的想像力が湧かせるイメージを先輩詩人が適切に表現しているのを読んで、大いに我が意を得たりとばかりの喜びを感じた。そんな中で、彼を最も喜ばせたのが、シェリーであった。そして、シェリーは話者の詩人としての目標となっていく。しかし、それだけでは、話者は、自分自身がこの詩を書くに至っていない。そのような中で話者にこの詩を書かせたのは、ポーリーンであった。先に引用したように871行目に「この詩は、あなたを通して始めたのだ」とあるが、ポーリーンの存在と彼女の一つの言葉が、話者にこの詩を書かせたのである。

話者がポーリーンに初めて出会った時は、意外にも嬉しい気分になっていた時期であった。それは昔の喜び、音楽や絵画が戻っていたからだ。そのような時に話者はポーリーンに出会うのである

が、ポーリーンの言葉がこの詩を書かせる。先に引用した冒頭の部分に続く詩行から考察を始めよう。

So that I might unlock the sleepless brood  
 Of fancies from my soul, their lurking place,  
 Nor doubt that each would pass, ne'er to return  
 To one so watched, so loved, and so secured.  
 But what can guard thee but thy naked love?  
 Ah, dearest! whoso sucks a poisoned wound  
 Envenoms his own veins, —thou art so good,  
 So calm—if thou should'st wear a brow less light  
 For some wild thought which, but for me, were kept  
 From out thy soul, as from a sacred star.  
 Yet till I have unlocked them it were vain  
 To hope to sing; some woe would light on me;

(ll. 6-17)

こうして、まどろむことのない空想の群れを、  
 隠れ家なる魂から解き放つことができる。  
 空想は一つひとつ去りゆき、かくも見つめられ、かくも愛され、  
 かくも守られた者のところには二度と戻らないことを、疑いもしない。  
 しかし、あなたの赤裸々な愛の他に何があなたを守るだろうか。  
 ああ最愛の君よ、毒に冒された傷を吸うものは誰であれ、  
 自分自身の血管に毒を入れるのだ。  
 私がいなければ、聖なる星のような、  
 あなたの魂の中には決して入ることのない、  
 荒れた思いのゆえに、あなたの顔つきが陰ったとしても、  
 あなたはとても善良で、とても穏やかだ。  
 だが、血管を広げないでは、歌うことを望むのは空しい。  
 歌えば悲痛が私に降りかかるだろう。

ここで「歌う」とは、もちろん詩を作るという意味であるが、この時期の話者にとって詩作は精神的痛みを伴う行為であった。そのような詩作ができたのも、衝立となって恐れから話者を守ってくれるポーリーンという存在のおかげであった。彼女の庇護を感じつつ、話者は次々と湧いて来る詩的想像力が生み出す「空想の群れ」を解き放つことができた。しかし、話者の告白を真面に受けとめることは、彼女をひどく傷つける可能性があり、彼に対するポーリーンの「赤裸々な愛」だけが彼女の心を守っていた。

実は、ポーリーンにモデルが存在するという説があり、サザランド・オール夫人 (Mrs Sutherland Orr) はエリザ・フラワー (Eliza Flower) がモデルだと主張している。<sup>8</sup> オールによると、エリザはブラウニングよりも九歳年上であったが、音楽家であり作曲もしていた。ブラウニングは彼女に手紙や詩を送っているが、彼女に対してブラウニングは淡い恋心を抱いていたようである。だが、それは後に「温かい、非常に忠実な友情」(“warm and very loyal friendship”) に変わったようだ。し

かし、彼女に対する称賛と温情の気持ちは変わらず、最後まで彼女の名前を無頓着に口にすることはできなかった。この詩の中に次のような詩句があるが、これは音楽に秀でていたエリザを髣髴とさせる。

. . . . . Be still to me  
A key to music's mystery, when mind fails,  
A reason, a solution and a clue.

(ll. 929-931)

それでも、心が音楽の奥深さを捉え損ねた時には、私にとって、ずっと音楽の神秘を探る鍵となり、理性、解決、手がかりとなってくれ。

彼女の妹で讃美歌作家として有名なサラ・フラワー・アダムズ (Sarah Flower Adams) もブラウニングと交流があったが、それは嬉しいばかりのものではなかった。この時代のブラウニングは彼女の信仰心を冷やし、「石のような悲嘆」(“stony griefs”) を与えたようである。<sup>9</sup> このことは、1827年11月、ブラウニングがまだ満十六歳にならない頃に、サラが元後見人であったフォックスに宛てて書いた手紙を読むとよく分かる。

私の心は長い間、彷徨ってきました。そして今、この戦いの絶えない世界の攻撃に対するあの唯一の抗しがたい砦である、聖書の真実性への硬い信仰を見失ってしまったように思えます。・・・暗雲は徐々に私の上に立ち込めてきましたが、自分の魂が暗闇に覆われていることに気づきませんでした。ですが、他の方に光を与えようとする際に、自分自身の暗い状態が固定しすぎていて、疑いを入れる余地もない状態になってしまいました。ブラウニングに返答しようとする時などは、私の心は議論を進めようとせず、臆病になり、敵の側についてしまいました。・・・そして今、私が初めて生を受けたハーローの部屋に座って、あたりを見回して、私を生んでくれた母のことを思い、生前も死に際しても熱烈なキリスト者であった母が息を引き取った寝室の窓を見つめていますと、私が今のような状態にいるより、生まれてこなかった方が良かったと母が考えているのではないかという思いが、次々に浮かんできます。<sup>10</sup>

サラはその後、このような悲痛な状態を過ぎ越して、新たな回心を経験して信仰を回復し、有名な「主よ、御許に近づかん」(‘Nearer, my God to Thee, ’1841年) という讃美歌を作詩したが、この時点で彼女がブラウニングの懐疑的議論に悩まされたとの逸話は、この詩の冒頭の部分を理解するうえで意味があると思う。話者にとって、ポーリーンは毒を受けながらも、それを吸い取ってくれる存在である。毒というのは、荒れた時代の話者の吐き出す精神的・宗教的毒素とでも呼ぶべきものであろう。この詩の中に表現される毒というものをブラウニング自身強く意識していたようで、彼はラテン語のエピグラフ(題辞)として、次のような特異な一文を引用している。

我々の本の題名が、その変わった性質によって非常に多くの人にそれを読む気にさせているのは疑いもない。そして、それらの読者のなかで、薄弱な精神の、偏った意見をもつ者たちは、その多くは敵対的で不作法ですらあるだろうが、我々の天才性を攻撃するだろう。彼らは無知

の性急さから、ほとんど題名も読まないうちに、我々が禁断のものごとを教え、異端の種を撒き散らし、正しい耳の持ち主を不快にさせる者、啓蒙された精神には感情を害するものであると叫ぶだろう。それで、アポロもミューズ全員も、天からの天使も、良心の呵責のゆえに彼らの呪文から私を救えないことを気にかけている。これらの人たちには、我々の本を読むな、理解するな、覚えるなと、今、助言を与えよう。というのも、それは有害で毒があるからだ。この本には地獄の門がある。それは石のことを語っているが、この本が、石を使って彼らの脳をたたき出さないように気を付けさせよ。しかし、偏見のない心でこの本を精読するに至った者は、蜂蜜を集める蜜蜂のように、大きな分別力と慎重さを発揮し、安全に読むだろう。というのは、あなたは少なからぬ教えと、大いなる楽しみを受けるだろうと思う。他方、もし、あなたが面白くないものを見つけたら、そこを飛ばして、利用しなければいい。というのも、そのような点はお勧めするのではなく、ただお示ししているにすぎないから。だからといって、その他のところまで拒絶しないで欲しい。したがって、もし何かが相当自由に語られたとしても、私の若さを許して欲しい。この作品を書いたのはまだ青年になる前の時であったから。<sup>11</sup>

この文章は、ハインリッヒ・コルネリウス・アグリッパ (Heinrich Cornelius Agrippa) の『隠秘哲学について』 (*De Occulta Philosophia*) の序文から採ったものである。コルネリウスは16世紀ドイツの有名な錬金術師であり隠秘学者であるが、この書籍はブラウニングの父親の六千冊に及ぶ蔵書の中にあつたものである。この中で、この書籍は確かに有害で、毒のあるものであるが、それは有益な情報を多く含んでいる。その上、これを書いたのは、まだ著者が青年とも言えない若い頃であつたから、どうか許して欲しいという思いは、『ポーリーン』を書いたブラウニングの思いでもあつたろう。

ポーリーンは外界から自分を守ってくれる存在である。それ故に、話者はポーリーンにだけは自分の弱さを表すことができた。自らの弱さは、その弱さの告白であるこの詩についての悲しくも最高の注釈になる。このようなポーリーンの存在を通して、話者はこの詩を書くことができたのである。

And here am I the scoffer, who have probed  
 Life's vanity, won by a word again  
 Into my old life—for one little word  
 Of this sweet friend, who lives in loving me,  
 Lives strangely on my thoughts, and looks, and words,  
 As fathoms down some nameless ocean thing  
 Its silent course of quietness and joy.  
 O dearest, if, indeed, I tell the past,  
 May'st thou forget it as a sad sick dream;

(ll. 236-244)

ここで、嘲る者たる私は、人生の空しさを探ってきたが、一つの言葉によって、自分の昔の人生へとまた勝ち取られた。私を愛して生きている、この優しい友の一つの小さな言葉によって、名も無い海の生物が、静けさと喜びに満ちた音のない行程を測るように、

私の思い、表情、言葉を糧にして奇妙に生きている。  
 ああ、いとしい者よ、例え私が過去のことを語っても、  
 悲しい病んだ夢として、それを忘れてくれ！

そんな時に、ポーリーンは話者に一つの言葉をかけ、それによって話者は昔の素直だったころの自分に戻ることができた。それが具体的にどんな言葉であったかは定かではないが、恐らく話を励ます言葉であろうと思われる。ただ、この詩中には、ポーリーンの発した言葉として具体的に明示されているものがあり、それは詩作を促す重要な意味を持つ言葉であった。

And then thou said'st a perfect bard was one  
 Who shadowed out the stages of all life,  
 And so thou badest me tell this my first stage; —  
 (ll. 883-885)

それから、あなたは言った、「完全な詩人というのは、  
 全ての人生のステージを書きとめた人である」と。  
 それで、あなたはこの最初の段階を表すように、私に命じた。

ここで「あなた」というのは、もちろんポーリーンのことであるが、彼女は話者に人生の全ての段階を描くことができるのが、「完全な詩人」であるからには、どんなに荒れた青春期であっても、それを赤裸々に描くべきだと勧める。それ故に、彼女は恋人というよりも、信頼を寄せることのできる友人のような存在であるが、ただの友人ではない。

· · · · · Thou lovest me,  
 And thou art to receive not love, but faith,  
 For which thou wilt be mine, and smile, and take  
 All shapes, and shames, and veil without a fear  
 That form which music follows like a slave;  
 And I look to thee, and I trust in thee,  
 As in a Northern night one looks alway  
 Unto the East for morn, and spring and joy.  
 Thou seest then my aimless, hopeless state,  
 And resting on some few old feelings, won  
 Back by thy beauty, would'st that I essay  
 The task, which was to me what now thou art:  
 And why should I conceal one weakness more?  
 (ll. 42-54)

あなたは私を愛する。  
 そして、あなたは愛ではなく、信頼を受け取ることになる。  
 それ故に、あなたは私のものとなるであろう、  
 そして、あなたは微笑んで、あらゆる姿と恥を帯び、

恐れなく、音楽が奴隷のように、その後が続くあの形を帯びるだろう。  
 私はあなたを見つめ、あなたに信頼する。  
 あたかも北国の夜、人が朝と春と喜びを求めて東をいつも見るように。  
 それから、あなたは私の目的もない希望もない状態を見、  
 あなたの美によって取り戻された、数少ない古い感情により頼んで、  
 今、あなた自身に相当する詩歌の仕事を試してみることを、望んでいる。  
 ならば、何故もう一つの弱さを隠す必要があるのか。

ポーリーンは単なる友人ではなく、まさに「あの形」、すなわち詩歌の姿を体現する存在なのである。先述のように、ポーリーンと初めて出会った時、話者は音楽などの喜びを感じていた時であったが、一方で詩人としての創作を休止している状態であった。しかし、そこに詩歌がポーリーンという人間の姿となって現れた。このことに関して、次の注釈は極めて示唆に富んでいる。以下は44行から46行までの部分の注釈である。

この難しい一節の意味は、次のようなものだと考えられる。ポーリーンは著者の内奥の空想を体現できる。(体現できなければ、彼を食い物にするであろう空想を体現できる。) 46行の“form”(「形」という語は、彼女の形(彼女の身体、あるいは、より広くは彼女自身)を表すかもしれない。それが、これらの仮面を被って消えていくだろう。あるいは、それは創造的想像力そのものでもある。ポーリーンの肉体的存在が覆いを被せる、すなわち、隠すとともに示唆することになる。<sup>12</sup>

確かにポーリーンの生身の人間としての身体的存在感は希薄であるが、彼女はこの詩の中で独特の役割を果たしていると言えよう。それは話者の荒れた空想に覆いをする役割である。この荒れた空想は、そのままにしておけば話者の心に大きなダメージを与えかねないものであるが、それに衣を着せて隠してしまうことにより、話者の心に安定を回復させることができる。だが、役割はそれだけではない。同時に、ポーリーンは、話者の見えない空想を顕在化する役割も担っている。ブラウニングの作品では、「空想」という言葉は、多くの場合、詩的想像力を意味しているが、この詩的想像力に具体的な表現方法を与えるのがポーリーンという存在なのである。そして、自分の弱さをもさらけ出して詩を作り始める。このようなポーリーンに対して、話者は詩的イメージが生まれる魂の洞窟の中に一緒に入って行ってほしいと願う。

Or we will go together, like twin gods  
 Of the infernal world, with scented lamp  
 Over the dead—to call and to awake—  
 Over the unshaped images which lie  
 Within my mind's cave—only leaving all  
 That tells of the past doubts. . . .

(ll. 966-971)

あるいは、語りかけ目覚めさせようとして、  
 死者の上に、香油のランプの光をかざした、

黄泉の国の二柱の神々のように、  
 私の心の洞穴の中にある、  
 未だ形作られていない姿の許へと  
 過去の疑いについて語っているものは皆、後に残して  
 一緒に進んで行こう。

詩を造り出す空想が生まれる場所は心の内奥であるが、そこはしばしば洞窟に比せられる。ここで二柱の神々とは、冥界の王ハーデスとその妻ペルセポネのことであるが、彼らが冥界で死者を目覚めさせようとしてランプをかざしたように、話者の心の洞窟の中に共に入っていき、まだ形になっていない新たな詩的イメージに光を当てて引き出して欲しいとポーリーンに願っている。それは、話者の中には野生の空想はあるが、それを具体的に詩の形にすることが出来ないからである。それを可能にしたものが、「美」としての話者に現れたポーリーンであった。その美が話者に昔の感情を蘇らせ、詩を書く力を与えた。その美によって空想が形を取ることができたのである。

For this song shall remain to tell for ever,  
 That when I lost all hope of such a change,  
 Suddenly Beauty rose on me again.  
 No less I make an end in perfect joy,  
 For I, having thus again been visited,  
 Shall doubt not many another bliss awaits,  
 And tho' this weak soul sink, and darkness come,  
 Some little word shall light it up again,  
 And I shall see all clearer and love better;  
 I shall again go o'er the tracts of thought,  
 As one who has a right; and I shall live  
 With poets—calmer—purer still each time,  
 And beauteous shapes will come to me again,  
 And unknown secrets will be trusted me,  
 Which were not mine when wavering—but now  
 I shall be priest and lover, as of old.

(ll. 1004-1019)

というもの、この詩は永久に留まって、  
 そのような変化に対する全ての希望を失った時、  
 突然、美が再び私に現われたことを語るだろうから。  
 ともかく、私は完全な喜びの中に、この詩に終わりをつける。  
 美に再び訪れられた私は、  
 他の多くの喜びも、自分を待ち構えていることを疑わないだろう。  
 この弱い魂が沈み、暗闇が押し寄せても、  
 ある小さな言葉が暗黒を明るく照らすだろう。  
 そして、全てをより明白に見て、

全てをより良く愛するだろう。  
 権利のある人のように、  
 思想の領域に再び向かうだろう。  
 そして、その時々をより穏やかに、なお純粋に、  
 詩人たちと共に生きるだろう。  
 そして、美しい姿が再びやって来て、  
 ぐらついていた時には自分のものにならなかった  
 知られざる秘密が、私に委ねられるだろう。  
 しかし、今や、私は昔存在したような、  
 祭司にして、愛する者になるであろう。

良き未来をもたらす変化への希望を失っていた時、突然ポーリーンが「美」として現れた。ポーリーンという存在に出会えた話者は、ポーリーンの庇護のもと、彼女の発する一つの言葉によってこの詩を書くことができ、魂がぐらついていた時にはつかめなかった「知られざる秘密」に近づくことができた。多くの人には未知の「知られざる秘密」を委ねられる者こそ真の詩人である、との自覚が話者の中に湧き始めている。そのような秘密の言葉を与えられた者が発する言葉は、たとえそれが弱い者の言葉であっても、多くの人々を動かうことができると確信した。引用の最後に「祭司にして、愛する者」<sup>13</sup>という言葉は、詩人という天職が神から言葉を預けられた者であり、やがて自分が本当の愛を発見するだろうという希望を表している。それ故に、話者はこの詩の最後でシェリーに対して、「太陽を踏む者よ、私は神と真理と愛を信じる」(“Sun-treader, I believe in God, and truth / And love,” ll. 1020-1021)と断言することができた。

以上の考察から、『ポーリーン』は、話者が「暗黒の悪鬼」のような状況から、「祭司にして、愛する者」へと変貌を遂げる過程が描かれた貴重な作品であることが明らかになった。その過程を可能にしたものは、詩歌を体現するポーリーンという存在であった。彼にも「目的もなく、希望もない」荒れた時代があったということは、その後のブラウニングの作品、特に「エピローグ」の上で引用した部分に続く、次の詩行を深く解釈する上でも極めて重要である。

One who never turned his back but marched breast forward,  
 Never doubted clouds would break,  
 Never dreamed, though right were worsted, wrong would triumph,  
 Held we fall to rise, are baffled to fight better,  
 Sleep to wake.

(ll. 11-16)

決して背を向けず、胸を張って前進した者、  
 暗雲が晴れるのを決して疑わず、  
 たとえ正義が敗れるとも、悪が勝ち誇るなどとは夢想だにしなかった者、  
 倒れるは立ち上がるため、挫折するのはよりよく戦うため、  
 眠るは目覚めるためと確信した者、それが私だ。

## 注

1. 『ポーリーン：告白の断片』のテキストとして、Ian Jack and Margaret Smith ed., *The Poetical Works of Robert Browning*, Vol. 1 (Oxford: Oxford UP, 1983) を使用した。この版は、『ポーリーン』の1833年版と1888年版を並置しているが、1888年版はテキストの改訂が多くなされているため、元の1833年版を採用した。また、「エピローグ」のテキストとしては、John Pettigrew ed., *Robert Browning: The Poems*, Volume II (Harmondsworth: Penguin Books, 1981) を用いた。さらに、『ポーリーン』のテキスト読解と解釈に当たっては、John Woolford and Daniel Karlin ed., *The Poems of Browning - Volume I - 1826-1840* (London and New York: Longman, 1991) を参照した。
2. W. Hall Griffin, compl. and ed. by Harry Christopher Minchin, *The Life of Robert Browning* (London: Methuen & Co. Ltd, 1910) 51.
3. この言葉は、「バイラー大学ブラウニング・インタレスツ」第2シリーズ、1931年6月所収のメアリー・D. レナウ「ブラウニングの『ポーリーン』初版」の中に引用されている。なお、本論文では、John Woolford and Daniel Karlin, 1991, 17から引用した。
4. John Woolford and Daniel Karlin, 17-18.
5. John Woolford and Daniel Karlin, 89.
6. ポーリーンによるフランス語の注を翻訳するに当たっては、Ian Jack and Margaret Smith, 89-90に掲載された英語訳を参照した。
7. John Woolford and Daniel Karlin, 32.
8. Mrs Sutherland Orr, *Life and Letters of Robert Browning* (London: Smith, Elder, & Co, 1891) 37.
9. W. Hall Griffin, 46.
10. W. Hall Griffin, 46-47.
11. ラテン語題辞の翻訳にあたっては、Frederick A. Pottle, *Shelley and Browning: A Myth and Some Facts* (Archon Books, 1965) 87-88 に引用された17世紀の英訳を参照した。
12. John Woolford and Daniel Karlin, 30.
13. 「愛する者」という語は、1888年版では「預言者」(“prophet”)に改訂されている。ラテン語では「預言者」と「詩人」を同じ‘vates’という言葉で表すことができるが、この改訂は晩年のブラウニングが詩人は本質的に預言者であるとの考えを持っていたことの証左であろう。

